

## マーケット概況（2019年11月）

11月の債券相場は、米中貿易協議に対する中国側の慎重な姿勢が伝わったことから買い先行で始まり、債券先物12月限は一時154円47銭まで上昇し、10年356回債の利回りは-0.190%まで低下した。しかし、10月の米国雇用統計が好調な内容となったことや、5日に実施された日銀オペで10年超25年以下の買入額が減額されたことから下落基調に転じると、8日には米中間で段階的な関税撤廃の合意に至ったとの報道を受けて下げ幅を拡大し、12日に債券先物12月限は一時152円44銭まで下落し、10年356回債の利回りは約6ヵ月半ぶりに-0.030%まで上昇した。その後は香港情勢を巡る米中対立懸念から買い戻され、20日の20年債入札が堅調な結果になったことからイールドカーブはフラット化した。22日に中国側から米中貿易協議を楽観視する旨の発言が伝わると債券相場は一時下落したものの、26日には来年度の発行計画で増額観測が出ていた40年債入札を順調に通過するなど相場は底堅く推移した。月末にかけては、米国株式市場が連日で過去最高値を更新したことや、28日の2年債入札が軟調な結果となったことから中短期ゾーンを中心に利回りが上昇し、10年356回債の利回りは-0.080%で月内の取引を終えた。

### <短国市場>

3M金利は-0.14%～-0.24%台のレンジで推移し投資家ニーズの動向を背景に金利変動の大きい展開となった。1日の3M867回債入札は業者の在庫余剰感から最高落札利回りが前回債から約1.3bp上昇し-0.15%台となった。しかし、8日の3M869回債入札では-0.14%台と-0.15%を超えた水準となったことで国内外の投資家需要が高まり、その後のセカンダリー市場でも金利低下の流れとなった。15日の3M870回債入札は-0.19%台、22日の3M872回債入札は-0.21%台に低下していたものの、月末にかけて海外投資家の買いが弱まり次第に在庫余剰感が強まった。29日の3M873回債入札では-0.15%台に大きく金利上昇し、最終的に-0.154%で取引を終えた。

### <一般債市場>

新発の政保債と地方債は6月以降適用されていた下限利率からスプレッド方式に回帰し、10年政保債は国債カーブ+8.5bp、10年地方債は同+15.0bpで決定した。国債の代替運用先として事前予約の段階から一定の需要が確認されていたが、条件決定日前日に国債金利が大幅に上昇し、利率が5月以来の高水準となったことから販売は好調であった。国債金利は一時不透明感があったものの、既発債は運用資金が流入したことで需給に大きな変化はなかった。社債はESG投資の拡大を受けて、事業会社では日本電産が、また地方銀行では群馬銀行が初めてグリーンボンドを起債した。これら環境債の発行が増加した影響もあり、月間発行額は5,995億円と11月としては前年に次ぐ高水準となった。

### ◎ 主要債券月間四本値 ◎

銘柄	始値	高値	安値	最終出来値
#356	-0.180(1日)	-0.190(1日)	-0.030(12日)	-0.080(29日)
#355	-0.195(1日)	-0.205(1日)	-0.045(12日)	-0.100(29日)
#345	-0.310(1日)	-0.310(1日)	-0.150(12日)	-0.210(28日)
#141(5Y)	-0.295(1日)	-0.315(1日)	-0.160(8日)	-0.180(29日)
#170(20Y)	0.190(1日)	0.185(1日)	0.325(12日)	0.250(29日)
#868TDB(6M)	-0.140(7日)	-0.225(14日)	-0.140(7日)	-0.225(14日)
#867-#873TDB(3M)	-0.160(1日)	-0.245(22日)	-0.145(8日)	-0.154(29日)